

銀座通りにおける街路景観の変遷

建設省土木研究所 天野 光一
建設省土木研究所 藤原 修

1.はじめに

本研究は、明治以降の銀座中央通り（通称銀座通り）を対象として、街路景観の変遷を把握し、更に各時代における街路イメージとその現定要因について考察したものである。その結果、街路イメージによる時代区分は、マクロにわけると3時代に、ミクロにわけると6時代になった。マクロにみた場合は、街路景観の急激な変化によって区分されていることがわかった。また街路イメージを規定している要因は、柳並木、沿道の建築物、覆柱、電線、街灯などの路上工作物、表-1 街路景観構成要素の変遷

物と人の服装などの風俗的なものであることがわかった。

2.研究の方法

本研究は大きく以下の3つにわけることができる。

1)街路景観の変遷の原因となる街路景観構成要素の変遷について、過去の文献、記録、写真等により調査し整理した。

2)街路イメージの変遷を、過去の文献等の調査によって捉えた。

3)街路イメージの変遷を、各時代の写真を用いた分類実験によって捉えた。

3.街路景観構成要素の変遷

街路景観構成要素を1)街路の断面構成及び舗装、2)街路樹、3)路上工作物、4)交通機関、5)街路沿いの建築物の5種類に分類し、それぞれについて過去の文献、記録、写真等によってその変遷を捉えた。その概要を表-1に示す。

1)街路の断面構成及び舗装
明治6年の銀座煉瓦街建設

	街路の断面構成 および舗装	街 路 樹	路上工作物	交 通 機 関	街路沿いの建築物
明	6年 車道8間歩道3.5間赤レンガ舗装 7年 車歩道間に緑石	6年 4辻に松間に桜、楓、側等車道の両端 8年 松、楓→桜 10年 すべて柳に植えかえ 17年 歩道側に移行	初期 路店両側 6年以降 東側のみ 7年 瓦斯灯	初期 人力車 5年 新橋駅 5年 東台馬車	27年 服部の時計塔
	21年 歩道の舗装銀座～尾張町まで赤レンガ→コンクリートブロック		15年 2丁目アーチ灯 20年 電柱、電燈線 36年 市電の架線	13年 馬車鉄道工事 15年 鉄道馬車 21年 自動車 36年 鉄道馬車→市街電車 43年 有楽町駅 45年 タクシー	
大 正	10年 歩道3.5間13間 11年 車道が木レンガ（電車軌道を除く）	10年 柳の抜去 11年 イチョウ植樹 12年 イチョウ栄養失調	7年 尾張町交差点終電報知器 8年 尾張町交差点交通信号 10年 瓦斯灯→電燈	3年 山手線 8年 青バス 10年 8月～12月通行禁止 13年 市バス	13年 松阪屋 14年 松屋
	9年 歩道の舗装銀座6～8赤レンガ→コンクリートブロック	7年 イチョウ→柳	6年 尾張町京橋交差点三色自動信号 9年 地下鉄入口 19年 街路燈接収 21年 照明部広告塔 26年 路店廃止街路燈復活 30年 「銀座発祥の地」建碑 31年 「煉瓦銀座之碑」建碑 39年 ソラウーボット9丁目交番再建 43年 都電軌道撤去架線電柱電線撤去フラウーボット撤去街路燈とりかえ	9年 地下鉄銀座線 32年 地下鉄丸ノ内線 38年 地下鉄都営一号线 39年 地下鉄日比谷線 42年 都電廃止 45年 歩行者天国	5年 三越 7年 服部の時計塔（現在のもの） 40年 三愛 45年 ライオンビル 46年 名鉄道ザ・ギンザコア 50年 ザ・ギンザ

にもなつて、幅8間(約14.4m)の車馬道と、その両側に幅3.5間(約6.3m)の歩道をもつ総幅員15間(約27m)の街路が完成した。大正10年の路面改良工事から昭和43年の改修工事まで車道が拡張され歩道が3間となっていたが、現在は歩道も3.5間にもどり煉瓦街建設当時とほぼ同じ断面構成となっている。したがって銀座通りにおいては、街路の断面構成はほとんど変化がなかったわけである。また舗装は、赤煉瓦舗装、コンクリートブロック舗装、木煉瓦舗装、アズベ色のカラー舗装、御影石舗装(御電の敷石を利用)と様々に変化してきたが、いずれもその時代の最先端の舗装であった。この中でも御影石舗装については、その費用1億5千万円のうち、銀座商店連合会が5千万円を負担して行っていることは注目されよう。

2) 街路樹

明治6年の銀座煉瓦街建設にもなつて、車道側の両端に街路樹が植樹された(図-7参照)。当初は四辻に桜、その間に桜、楓、柳等が植えられたが、そのうち車馬道をはしる馬車などのまきあげるほこりのせいか桜や楓が枯死したため、明治8年に枯れたものは桜に植えかえられた。しかし、そのうち桜、楓も枯死があいつぎ、桜も花が咲かないため明治10年に柳に植えかえられた。この時、車道側にあった街路樹を歩道側に植えかえたものと思われる。これがいわゆる「銀座の柳」のはじめである。このうち、大正10年の路面改良工事の際に東京市によって柳が引き抜かれ公孫樹に植え替えられたが(図-9参照)、銀座商店連合会などの反対にあい、昭和7年に再び柳に植え替えられた(図-10参照)。この銀座の柳は昭和43年まで存続するが、この時の改修工事にもなつて柳が引き抜かれて以来現在に到るまで、銀座通りには街路樹はない。

3) 路上工作物

まず街路照明について述べよう。明治7年に瓦斯灯が設置され(図-7参照)、大正10年に電灯につけかえられるまで存続した。その間明治15年にデモンストレーションとして銀座2丁目に2000燭光のアーチ灯が設置された。そのうち昭和19年に金属非常回収のため撤去されたが、昭和26年に街路灯196本が復活した。昭和43年にすべて新レ、ヒリかえられ、96本設置されて現在に到っている。次に電柱、電線であるが、初めて設置されたのは明治22年頃であると思われる。明治36年には市電の架線もこれに加わり、銀座の空には電線がはりめぐらされたが(図-8、9参照)、昭和43年の都電の撤去、共同溝の設置によりこれらはすべて姿を消した。フラワーポットは昭和39年にはじめて設置され、それ以降現在まで形は少しづつ変化しているが設置されている。戦後、昭和30年に「銀座発祥の地」の碑が銀座2丁目に、「煉瓦銀座の碑」が京橋角に建てられ銀座の歴史を教わすようになった。その他の標識、ゴミ箱、電鈴ボックス等については今回は明らかにできなかった。

4) 交通機関

明治5年の新橋鉄道開通にもなつて、新橋浅草間に集合馬車が開通した。当時の交通機関は、この馬車と人力車がほとんどであった。馬車に代わって明治15年に鉄道馬車がはしりだした。これが明治36年に市街電車となり、昭和43年に都電が撤去されるまで路面電車は銀座通りを走っていたわけである。また自転車は明治21年頃から街中をはしっていたようである。タクシーは明治45年頃からあったが、第一次世界大戦の大戦象徴(大正3年頃)、震災による電車の全滅(大正12年)によって飛躍的に増加した。地下鉄が開通し銀座通り上に入口ができたのは昭和9年である。

5) 街路沿いの建築物

大正10年、昭和5年、昭和17年、昭和28年、昭和44年、昭和55年の銀座通り沿いの建築物の変化を文献と現地調査によって展開図としてまとめた。図-1に銀座4丁目、5丁目の例を示す。明治初期から関東大震災まではほとんど初期の煉瓦造りが続いているので、大正10年以降にのみ着目しても十分であると思われる。

4. 文献調査による街路イメージの変遷

街路イメージについては各時代の文献等に記述が表われた時にそのイメージが存在したと考えたこととした。

大正10年	昭和5年	17年	28年	44年	55年
		ビル	フジアイス		東洋信託銀行
					教文館
			東本運動具店		ヨシノヤ洋品店
	新川洋服店	サザレ			フタミカノラ
	柏木洋傘店	WIDE鉄道案内所			
	赤ひょうたん			モーターボート商會	
	三河屋カステラ店				
					御木本真珠店
			月ヶ瀬		山野楽器店
日本屋靴店					木村屋パン店
寺内時計店					
銀座四郵便局					
秋葉人力店					
		銀座時計店			服部和光
空地	建築場				

55年	44年	28年	17年	昭和5年	大正10年
三和銀行				山口銀行	(建築中)
オモチャキンタロー		金太郎玩具店			
コーヒーマ					長集金時計店
半鈴・常津田屋			えり久		
洋装銀座シルク				丸貝屋食堂	田屋洋品店
紳士洋品田屋		田屋洋品店			蔵そば
紳士洋品モトキ				宝来パン	天 虎
洋装生地いさみや		いさみや洋品店		佐野正宝商店	中央金時計店
7 HOUR PHOTO		江戸屋外人雜貨店	近藤書店	神谷ネル店	
三越入口		明孔売店	松村金銀店		
マクドナルド					久留米餅店
		三越			神谷ネル店
					木村屋パン店
					田屋半鈴店
					常盤タバコ店
					山崎洋服店

		位置是發店			三 愛
八十四銀行	昭和銀行	キリンビヤホール			居酒屋
					日本堂
常盤下駄店	須田タバコ店	常盤タバコ店			
川本五商店	カフェ松月	不二家			ハンドバック大黒屋
大平屋郵便局		大黒屋食料品店			オリニック
松山洋貨店					アメリカ屋靴店
	大丸洋服店	東條靴店			ワシントン靴店
	やまきんモスリン店	丸高均一ストア	千蔵酒蔵		
三河屋美術店	帆かけ寿司			森 水	モリナグ
龍井食肉堂	日華堂洋品店				
東京電機	カフェタイガー	銀座ブラジル	スエヒロ入口		ユニ
ホスピタルサプマイ商社			ストッキングソリボン		メル
本國幸商店	千代田婦人帽子店		洋品アレット		サ
			ナイロンショップ		
			USコーヒ入口	コーラス喫茶ハーモニー入口	
芝浦販売所	マツダランプ			カワセ洋装店	

入口 ウィンドウ ビル入口 地下鉄入口	サブ ポロ ビル 地下鉄入口	サブ ポロ ビル 地下鉄入口	ビヤホール ライオン	カフェ ライオン	美濃堂 ハッピーシー 早川亭	八十四銀行 建築場
	銀座洋品 藤屋	フジヤ 洋品店	フランス屋	十一屋		中北器機店
銀座 エレベ ア	毛皮オリヤマ 時計・貴金属 婦人服 カシワ むしずし いとほん	オリヤマ靴店 大黒屋時計店	ミツミ銀座店	増見屋洋服店	大竹銀座店	服屋手私店
	お菓子 月ヶ瀬		千近屋分店		荒川玩具店	加藤洋貨店
跡地						
レストラン コックドール			藤原靴店	フタバ	美佐古 送業書店	折山靴店
やまとや洋服店		やまと製物店		全務金時計店		
岡録三美堂	岡と三 三美堂		東郷写真機店	水沢漆器店		牧野研究所
白牡丹						
ナカヤ シャツ店						
第一勧業 銀行	第一銀行					東海銀行

図-1 銀座通り沿いの建築物の変遷 (銀座4丁目, 5丁目)

逆に文献等に記述されてのちにイメージが構築される場合もあるが、本論のとしている時間の精度から考えればそれほど問題とはならないと思われる。まず街路イメージの変遷および街路景観構成要素の変遷との関連について概要を、それぞれ図-2、図-3に示す。

1) 明治5年の銀座煉瓦街建設までは、銀座は武士と職人の住む街で場末であったと言われる。野崎左文は次のように語っている。

「京橋は幅員狭く三間に過ぎざる木橋にして左右十箇の柱に銅製の擬宝珠を飾り、之を渡れば銀座一丁目にして本通の幅員は六間に過ぎざりき、其の家屋は橋手前なる南低馬町に比すれば頗る見劣り……中略……、尾張町を経て新橋に進むに従ひ一歩一歩は上り場末の景状となり……後略」

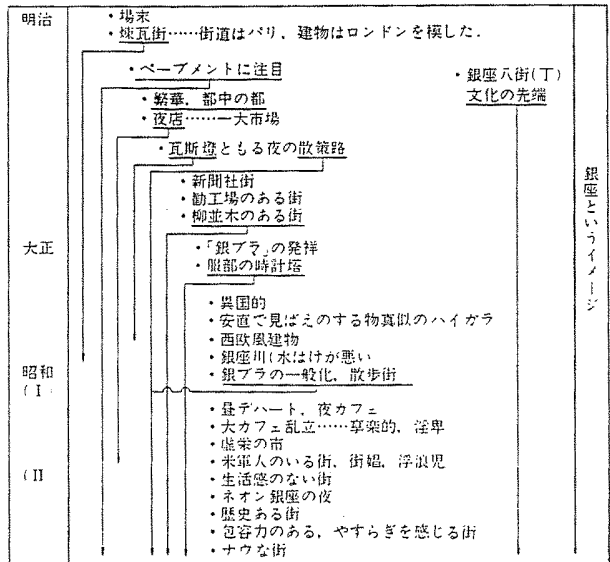


図-2 街路イメージの変遷

このように場末のイメージでとらえられていた銀座が煉瓦街の建設によって、「開化の大将」と称せられ「真に都中の都にして、繁華中の繁華」(東京新繁昌記)と呼ばれるようになったのである。またこの頃から現在に到るまで舗装に着目している記述が多いが、これはつねに時代の最先端の舗装を行っていたからであらう。また成島柳北の観銀座夜市記などにも見られるように、銀座はガス燈とる夜の散策路であり、夜店による一大市場であった。しかし当時新聞を発行していた新聞社のほとんどが銀座にあったことを考えれば、一般大衆の繁華街であるとともに政治的色彩の強い新聞社街であったことがいえる。明治末期にうたわれていた電車唱歌(石原和三郎)は銀座を次のように描いている。

「十四 京橋わたれば更に又
光まばゆき煉瓦街
路には煉瓦をしきならべ
なみ木の柳風すすし

十五 銀行 会社 高館の
ならべる大廈高構は
いずれも石造 煉瓦造
目を驚かさばかりなり」

柳並木がイメージとして文献に登場するのはこの電車唱歌がはじめてであり、柳並木が完成してからイメージとして定着するまで20年程度かかっている。また当時流行した、た勤工場(百貨店)も銀座には6軒もあり、勤工場のある街というイメージもおなじみと思われる。

2) 大正初期、フランス等の文学に感化された文学青年たちが異国的な雰囲気をも求め銀座へ集まってきた。彼らを中心として銀座の散歩が定着していき、「銀ブラ」という言葉が当初の「遊び人」や「地まわり」という意味が

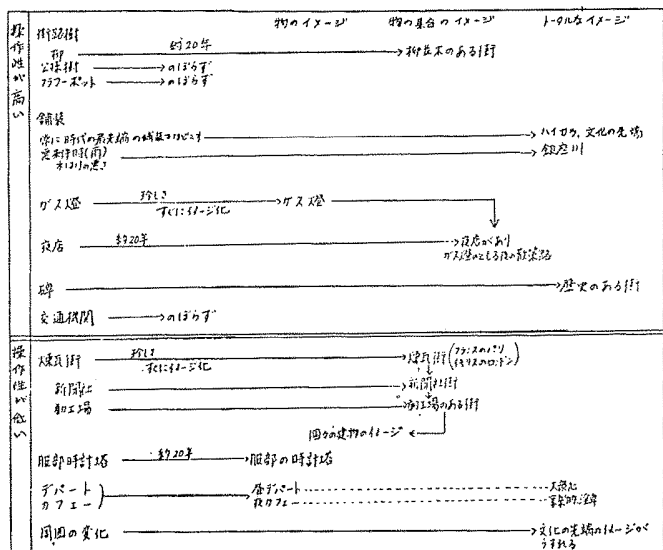


図-3 街路イメージと街路景観構成要素の関連

ら、銀座の散歩の意味に変化していった。この「銀グラ」は震災後より強いイメージとして定着していった。明治のはじめには壮観であるとか日本一とか称された漢方街であったが、「銀にいぶしをかけたのは日本橋気質で、安直で見栄のするアルミニウムは京橋根性である。」（東京新繁昌記、山口義三）というように、物真似のハイカラ、安直で見栄えがするなというように評価が変化してきた。これは、建物のファサードに人の姿はいったことと、人々が西欧風であるということだけで評価せず、自分の目でものを捉えだしたからであろう。この頃やと服部の時計塔について「服部の大時計は銀座を装飾すべき、主要の部分」（東京新繁昌記）という記述が見られ、建設された明治27年からイメージとして定着するまで20年あまりかかっている。大正末期には、銀座を称して「銀座川」というように雨の日は水はけの悪さがそのままイメージにつながっていた。

3)関東大震災を経て昭和に入ると、ビルディングを店舗としたデパートが進出し、カフェーの増加ともな、て、昼はデパート、夜はカフェーといったイメージが出現してきた。「大カフェー乱立時代」（銀座解剖図、石角春之助）であり、そのカフェーはエロサービスを売り物にしていたものが多かったため、享樂的とか淫卑とかいうイメージが生まれてきた。

昭和7年には街路樹が公孫樹から柳にもどった。公孫樹は大正11年に植えられたのだが、イメージにはのびてこない。公孫樹の植わっていた期間が約10年であり、柳がイメージに定着するのに前述したように約20年ほどかかっているのを見れば当然かもしれないが、それまでの柳のイメージが非常に強かったという事はいえよう。この時西条八十は「パリのマロニエ 銀座の柳 ……」(銀座の柳)とうた。ており、彼にいわせれば銀座の柳はパリのマロニエにも匹敵するものであった。銀座がしだいに大衆化してきたとはいえ、銀座は高級品を扱っているというイメージがあったため、戦時体制に入りせたくが敵視された時代には公然と「虚栄の市」と呼ばれた。街のイメージ自体はそれほど変化しなくとも、社会的状況の変化により評価が大きく変わるということがいえる。

4)戦災を受け終戦をむかえた銀座は、米軍人が歩き、街娯や浮浪児のうろつく街となった。この様子は田村泰次郎の「肉体の門」などにうかがわれる。このいわゆる戦

表-2 更紗に用いた字彙の一覧

後の時代がすぎ昭和30年代に入ると歴史ある街としてのイメージが生まれてきた。野田亨太郎が「日頃の馴染み深い銀座とはいえ、こうして碑の前に立っていると、やはり歴史の街に來た旅人のような^{おもた}思いを私は覚えた」(文学散歩)といっているのを見ると、歴史的な事実を表わしている碑の存在が歴史ある街というイメージを生み出したのであろう。

その歴史性のゆえに、「ゆるぎない自信に支えられて生じる銀座の包容力は、人々を懐の深い所を受けとめてくれる。」(森戸紀子、銀座点描)と評されており、包容力のある、ゆるぎを感じさせる街というイメージも徐々に生じてきたように思われる。

野田亨太郎は、前出の「文学散歩」の中で、服部の時計塔や柳にもふれており、これらがその頃も銀座のイメージを構成する重要な要素であったことがわかる。この頃から店舗拡大などの理由で銀座に居住する人が少なくなり、生活感のない街というイメージが生まれてきた。昭和43年の改修工事によって電柱や電線、都電とともに

明治		大正		昭和Ⅰ (戦前)		昭和Ⅱ (戦後)	
年	写真No.	年	写真No.	年	写真No.	年	写真No.
7	24	70	44	初	45	20	4
7	33	71	30	4	14	25	2
7	43	74	28	9	5	25	46
7~8	11	11	26	10	13	30	12
8	32	12	25	10	17	30	35
23	27			10	1	30	38
28	18			10	19	32	6
30	15			12	22	34	9
37~38	29			12	16	39	39
45	31			13	21	42	8
				13	10	42	3
				14	20	43	40
				14	23	43	42
						44	34
						46	36
						48	7
						48	47
						51	37
						54	41

表-3 銀座のイメージを表わす語群

イ	柳並木のあな街
ロ	西武風建物
ハ	生活感のない街
ニ	夜店
ホ	文化の先端
ヘ	湯木
ト	銀座
チ	異国的
リ	豪華な
ヌ	歴史ある街
ル	レイン街
ヲ	安直で見ええいする物真似のハイカラ
フ	ナウな街
カ	虚栄の市
ジ	カス燈いある数寄路
ク	やすすぎを感じる街
レ	都心の街
ソ	ネオンとも銀座の夜

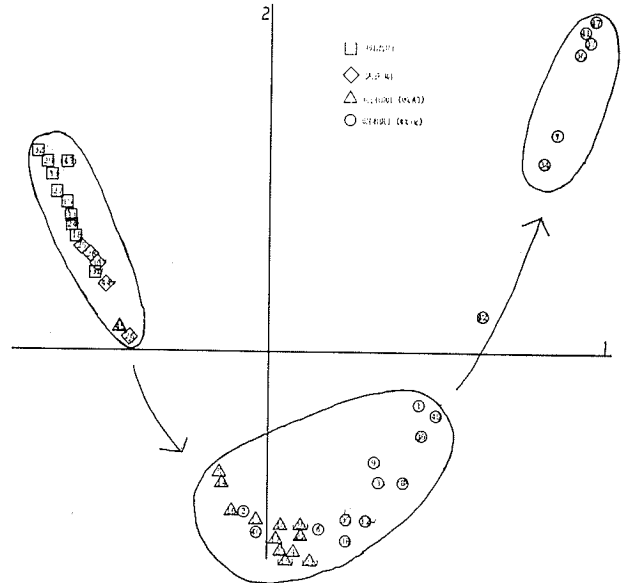


図-4 1軸と2軸による空間布置

柳は消えてしまいましたが、まだ「銀座の柳」というイメージは消えていないように思われる。柳がイメージとして定着するのに時間がかかったように消えさるのにも時間がかかるのであろうか。昭和42年の三越改築の頃から、「ナウ」な街というイメージが生まれてきたように思われる。これは昔からの「銀座」が若い世代に受けつがれてきたのであろう。

5. 写真分類実験による時代区分とイメージの変遷

1) 実験方法 明治初期から昭和54年までの各時代を典型的に現わしていると思われる写真を47枚用いた。その時代毎の内訳を表-2に示す。被験者は対面であり、そのほとんどが20代前半の学生であった。47枚の写真を被験者に呈示し、「ほぼ同時代と思うもの同志を一つのグループにまとめ、47枚全体を幾つかのグループに分類し時代順にならべて下さい」という指示を与え、写真を分類してもらった。そののらそれぞれグループについてそのグループのイメージをあらわす言葉として適当なものを、あらかじめ用意した語群(表-3)から選んでもらった。この語群は文献によって銀座の街路のイメージを把握した際にでてきたものから選んだものである。また、それぞれのグループの景観的特徴についても記述してもらった。

2) 実験結果とその考察 分類グループ数および、その数に分類した人数については図-5を参照されたい。

写真 i , j を同じグループに分類した被験者の数を写真 i , j の近さを表わす指標として数量化Ⅱ類を用いて写真間の関係および構造について検討した。1軸と2軸による空間布置の結果を図-4に示す。図-4から、あ

年代	3	4	5	6	7	8	時代を画すべき事
明治	I	I	I	I	I	I	
大正			(イ,ロ)	(イ,ロ)		(イ)	
昭和	II	II	(ロ)	III	IV	IV	関東大震災
			III	(イ,ロ)	(イ,ロ)	(ロ,ロ)	
			III	(イ,ロ)	(イ,ロ)	(イ,ロ)	戦災
		III	IV	V	VI	VI	高度成長期
			IV	(イ,ロ)	(イ,ロ)	(イ,ロ)	
	III	IV	V	VI	VII	VIII	昭和43年改修工事
			(イ,ロ)	(イ,ロ)	(イ,ロ)	(イ,ロ)	

図-5 街路イメージによる時代区分

(注: (イ,ロ)……は表-3の語群の対応)

さらに1軸は時間の軸であり、1軸に注目すれば3分類されていることがわかる。この3分類されたものと被験者によって4~10分類された写真に注目して、分類数が多くなると時代区別がどのように変わっていくかを整理したものを図-5に示す。時代区別について述べよう。昭和43年の改修工事による変化は、路面電車、電柱、電線、柳という主要な街路景観構成要素が急になくなったため強いと考えられる。関東大震災による区別は、街路の様子が一変したという意味で同様であろう。高度成長期に入ったところで区別されるのは沿道の建築物が急激にビル化していったためと思われる。明治~大正、戦災による区別が、前述のものに比べてあまり強くはない。街路景観の変わり方があまり急でなかったためと思われる。次に数量IV類の2軸と3軸による空間布置の結果を図-6に示す。この空間布置と前述した時代区別とともに47枚の写真を6つのグループに分類した。それぞれのグループについて代表的な写真と示しながらその特徴について述べよう。

オIグループは明治期のもので、西欧風建物、ガス灯、柳などが景観的特徴としてあげられており、文明開化、ハイカラというイメージがその中心を構成するグループである。(写真-1)。オIIグループは、明治後期から大正初期のもので、オIグループと同様、西欧風建物、柳が景観的特徴としてあげられているが、その他に電柱、電線、路面電車などがあげられている。赤坂新風はこの頃の銀座について「今日東京の表通りは銀座より日本橋通り、丸の内通り、有楽町通り、有明通りと始めとして到處西洋市街の建築物とベンチ等の看板渡り装へた並街とまでは遠くは事無き然るに災厄するもの

電信柱とヒメ目するいい電線の綱目の為めに、云ふまでもなく静寂の美と保つてきた江戸市街の整頓と美し、レいわも猶未だ音律的な美と有する西洋市街の外に加ふる事も出来ない。」と語っている。したがってこのグループは整に張りめぐらされた電線や路面電車のイメージのグループであるといえる。(写真-2、写真-3) オIIIグループは、昭和初期のもので、銀座、文化の先端というイメージが強く出てきた。現代と比較して文化の先端というイメージが強いという、意味としては文化の先端だったというふうな感じのあったイメージであろう。また景観的特徴としては、服装、夜店といった風俗的なものが多い。このグループを若い学生が中心の被験者は右よりの時代と判断したのである。(写真-4) オIVグループは3枚とも昭和30年の写真である。柳、銀座、ハイウェイイメージはあいかわらず強く出ていて、写真にうつっているものが初期のデパートであり、デパートのまわりはじめというイメージのグループと思われる。(写真-5) オVグループは昭和30年代後半から昭和43年に都電が撤去されるまでのものである。ここでは、ビル

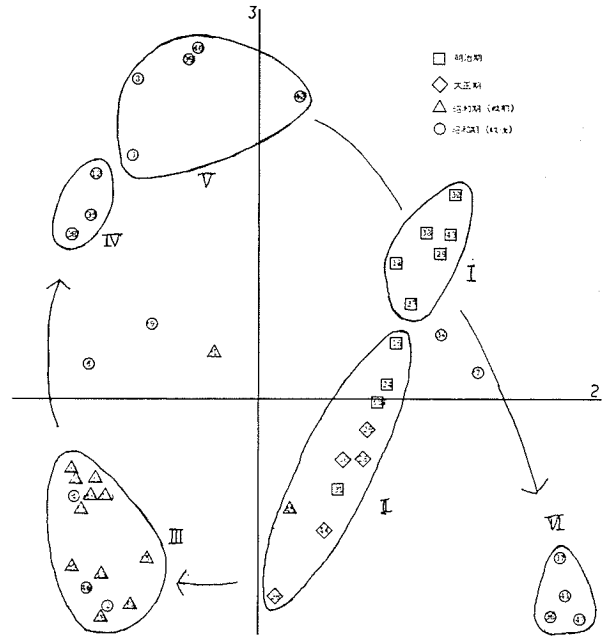


図-6 2軸と3軸による空間布置



写真-1 (写真No.33) 明治7年

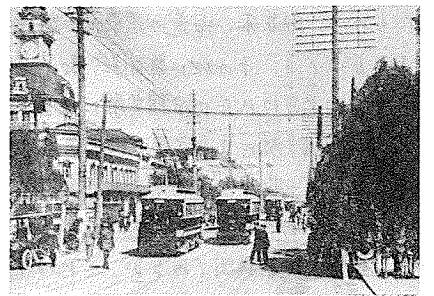


写真-2 (写真No.31) 明治45年 (柳の並木)

の高層化、近代化、人や車の混雑、にぎやかなどの特徴があげられており、高度成長期までに変わっていったというイメージのグループであろう。(写真-6) Ⅱグループは昭和43年の改修工事以降のものであり、都電や電柱や電線や柳がない。現在とほぼ同じであるという指摘が多く見うけられ、現在と同じイメージをもったグループといえる。(写真-7)

6. まとめと今後の課題

(1) 街路イメージによる時代区分

文献による方法では明確とはならないが、分類実験ではかなり明確な結果となったと思われる。文献による方法では便宜的に明治、大正、昭和(戦前、戦後)とわけていたが、分類実験による方法では、マクロには震災、昭和43年の改修工事という時代に区分され、ミクロには各時代に区分された。やはり街路景観が急激に変化する時点では明確に区分されるが徐々に変化する場合は明確には区分されにくいであろう。したがって、今後この方法をすすめていくことにより急激に変化するのか、徐々に変化するのかといった変遷のパターンに言及できるものと思われる。

(2) 各時代のイメージ

文献による方法であらわれたイメージが分類実験による方法においてもかなりあらわれたが、時代は必ずしも一致しなかった。これは、街のイメージを判断する人が文献による方法によらずの時代に暮らしている人々であり、分類実験による方法では現代の若い学生であるということ、また分類実験の場合のイメージは、写真にのらうによるものということ、また実際には街路景観構成要素が変化してからのイメージとして定着するまでかなりの時間がかかるということから分類実験にはとりにくいと思われることなどによると思われる。しかし、逆にいえば、分類実験による方法ではフィジカル的要因とイメージの結びつきが把握しやすいという利点が考えられる。今後この方法をすすめていくことにより、よりフィジカルが要因の変化とイメージの変遷の関係を明らかにできるものと思われる。

(3) 街路イメージの規定要因

文献による方法、分類実験による方法ともに規定要因としてあらわれたものは、柳並木、沿道の建築物、街灯、舗装などである。文献による方法では、その他に新聞社、加工工場、服部時計塔、碑、カフェなどであらわれたが分類実験による方法ではあらわれていない。これは、分類実験による方法では、写真にうつっている物しかめらっていないという事、判断する人が現代の人でその時代に暮らしていないためと思われる。分類実験による方法でのみあらわれたものは、電柱、電線、交通機関であるが、これは写真の中で強調されてうつっているためであろう。

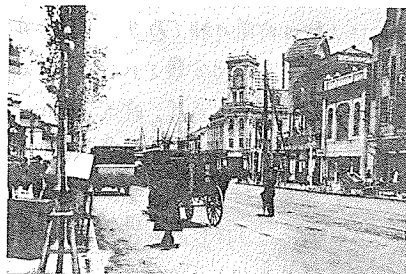


写真-3 (写真16.25) 大正12年(公孫樹の並木)

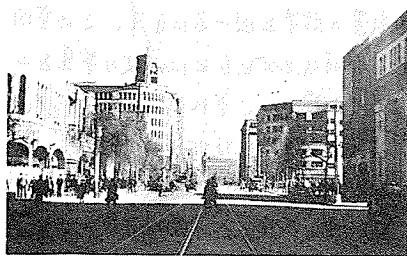


写真-4 (写真16.4) 昭和14年



写真-5 (写真16.38) 昭和30年



写真-6 (写真16.8) 昭和42年

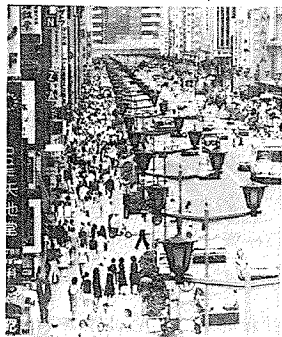


写真-7
(写真16.41)
昭和54年